日ロ交流

発行　：特定非営利活動法人　日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page http://www.nichiro.org
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号
Tel：03（5563）0626　Fax：03（5563）0752

イルクーツク留学記

渡邉　眞子

2017年8月から2018年6月にかけてロシア・シベリア東部に位置するイルクーツクに留学した。今回のロシアへの長期での留学は2016年のモスクワへの短期留学がきっかけとなった。当時もっとこの国とロシア語について理解したいと感じたためだ。

ロシアに初めて降り立ったとき、私が見たものはヨーロッパ化された、近代的な建物が立ち並ぶ大都会モスクワだった。その時は強く意外性を感じたことを覚えている。そこには自分が世界史の教科書で見ていたようなソ連の面影をありありと感じることはできなかったからだ。

一方、イルクーツクに来たばかりの頃を振り返ると良くも悪くもソ連の面影が未だに残る小さな町という印象を受けた。数十年ほど前にできたように見受けられるコンクリートの集合アパートやゆがんだ道を走る土埃のついた車…そんなイルクーツクでの生活で一番記憶に残っていることと言えばやはり数か月にわたる厳しい寒さである。9月に初雪が降って物珍しがっていたのも束の間、10月には既に日本の冬を超えた寒さになっていた。11月から2月にかけては氷点下2ケタはざらで、外に出たとたん冷気でむせこみ、痛いのを通り越して皮膚の感覚が無くなるほどだった。毛皮のコートを着てうつむきながら雪で踏み固められた道を黙々と歩く人々をみてまさにロシアのステレオタイプだと実感した。イルクーツクには他の都市と比べて華やかな観光名所や娯楽施設などは少なく、気候も過酷なため比較的住みづらい街かもしれない。そのような中でこの気候が人々の心理に直接的に影響しているかは定かではないが、出会った人はどこか哀愁を感じさせる雰囲気を醸し出しているような気がしてならなかった。

最終的にこの街と人をどう総括するべきかいまだに結論は出せていないが、今ではあれほど辛かった冬の寒さですら懐かしむようになっているので噛めば噛むほど味のある町、というようにしておこうと思う。去った時には次にまたこの地に足を踏み入れるのはいつのことになるやら見当もつかないと思ったが、今ではそう遠くない日のように思われる。おそらく日本にいるほとんどの人が一生来ることのない土地に来て、経験できたことの数々は一生ものとなり、また新たな目標を持つこともできた。外気で凍らせたバナナで釘を打ってみるというもう一つの小さな夢を残しつつ、次回向かうまでに一層語学の習得に努めようと思う今日である。

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中！

平日クラス月4回¥5500×3ヶ月前納。
初級2（月）19:30-21:00、初級クラス1（水）18:30-19:30
準中級会話（月）18:00-19:30
上級クラス（土）10:00-11:30、購読（第4土）13:30-1500
＊講師の都合などで休講になることもございますので、見学をご希望の方は予め事務局までご連絡ください。

●テーマ別ロシア語第8回「映画、テレビ」続編

日時：11月18日(日)13：00～16：00
場所：交流協会事務所
費用：会員3,000円、一般4,000円
講師：オクサーナ・ピスクノーワ
＊好評につき、続編としてロシアの人気長寿番組「Сваты」（1回毎に完結）を見て生きた会話の勉強をします。

●マトリョーシカ展示・体験会

日時：2018年11月5日（月）～7日（水）
場所：神保町「書泉グランデ」7階イベント会場
マトリョーシカ教室の生徒さんと先生の作品展示、即売、実演、体験があります。今回は似顔絵アーティスト田畑伴和氏に特別参加していただきます。(5日午後のみ)
＊入場無料（ロシア直送チョコレートもあります！）

●第57回マトリョーシカ絵付け教室

日時：2018年12月16日（日）13：00～16：00
講師：菅野エレーナ
場所：田町駅みなとパーク芝浦「リーブラ」2階造形表現室
会費：3,000円（5個セットの教材、講師代、お茶代含む）

●第50回懇話会

講演会『在日四半世紀　ロシア人が見た日本』
講師　ミハイル・モズジェチコフ氏。
講師は在日ロシア人交流会会長、元NHKのロシア語講座メンバー。日本で博士号を取得し日本の女性と結婚。現在ドイツ系企業に勤務。四半世紀に及ぶ生活から見た日本と日本人。またこれからの日ロ関係を語る。
日時：12月8日(土)13:30～16:00
会場：東京外国語大学本郷サテライト4F文京区本郷2-14-10
　Tel：5805-3254　地下鉄本郷3丁目駅5分
会費：会員／日ロ友好団体／外国人2,000円　一般2,500円
　会員学生1,200円　一般学生1,500円
申込：学生／会員／一般明記、氏名・電話・Email等協会まで
懇話会部員募集 simatac37@gmail.com080-4325-9981 川島

＊お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで
Tel：03-5563-0626　nichiro@nichiro.org

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

ロシア料理講習会Ⅳ

山根 佳子

9月24日、マイヤ先生のロシア料理講習会「ブリヌイと『ハリネズミのスープ』」が行われた。ブリヌイはロシアのクレープで、魚やイクラ、肉等を包んだ軽食。『ハリネズミのスープ』は、米をまぶしたミートボール入りスープで家庭の料理。米がふくらみ、ミートボールがハリネズミみたいになるのでこの名がついたようだ。

今回『ハリネズミのスープ』は私が提案した。普段は自炊だが、残業から疲れて帰るともはや夕飯作りをがんばれないことも。朝食も毎朝取りたいし、一度でたくさん作れる栄養満点レシピを常に情報収集している。ある時インターネットで、ロシアの『ハリネズミのスープ』の記事を読んだ。筆者はロシア人の友人に「おふくろの味」として教わったとのこと。なら私もロシア人から教われますか、とお尋ねしたら今回開催の運びとなった。先生、交流協会の皆様、感謝します。

今回は同じ調理台で2人の方とご一緒した。まずじゃがいもを水から茹で、次に人参と玉ねぎを刻みフライパンで炒める。ひき肉をボールにして米を表面にまぶす。人参玉ねぎ炒めはじゃがいもの鍋に投入する。後片付けが楽になるようフライパンをさっさと洗ったら、マイヤ先生が言った。「洗わなくて良かったのに！炒め油に野菜の味が出るから、次にミートボールをそのまま焼くと良かったんだよ。」なるほど日本人はすぐ先回りして準備するが、それが時に余計だったりする。今回ご一緒したご婦人が、文化交流活動でロシアを頻繁に訪れるそうで教えて下さった。「ロシアの人達って食べ物を絶対に無駄にしないの。きっと経済的困難を乗り越えてきたからでしょう。料理の仕方もとても合理的。ロシア料理はおいしくて、現地でいっぱいふるまわれるから、沢山いただいてしまうの。」料理もだが、いろんな方がご自身で見聞きしたロシアについて教わるのが毎回楽しい。まだ料理もできていないのに、今日も参加して良かったと思った。

ミートボールをフライパンで表面がこんがりするまで焼く。こうするとスープに入れても表面の米がべたっとならない。弱火で10分ほど煮て、最後に刻んだピーマンとディル（ハーブの一種）を加えた。

他方ブリヌイ生地の準備。これをきれいにひっくり返して両面を焼くのが至難の業。まず紙切れをフライパンでひっくり返す練習をする。その後実際にブリヌイを山ほど焼いた。やぶれても焦げてもめげない。冷めたら、きれいに焼けた側を表にハムやチーズ、ひき肉を包む。春巻きのように細長くしても、正方形や巾着のようにしてもいい。

気づくと見事なブリヌイ作品が各テーブルで出来上がり、たっぷりの『ハリネズミ』スープも完成した。いよいよ試食。スメタナ（ロシアのサワークリーム）をスープに多めに入れ口に運ぶ。お米入りで腹持ちが良さそう。ブリヌイも色々な味と形で面白い。両方とも早速うちで作ってみよう。『ハリネズミ』を平らげ、ブリヌイを一つ食べたらもうおなか一杯。あとはみんなで持ち帰ることになった。

職場の大先輩が、実は若い頃シベリア鉄道で極東からヨーロッパまで一人旅をしたとおっしゃった。当時まだソ連時代で今とは違う情勢だったようだが、私が交流協会で学んだことをお話しするととても興味を持たれ、話が毎回盛り上がる。ロシア料理も大好きらしいので、このレッスンのこともお話しするのが、今からとても楽しみだ。

港区麻布区民センターでの第31回ふれあい祭りに参加

田中 徹

「ロシア民謡を楽しむ会」は10月20日（土）に港区麻布区民センターで開催された「港区麻布区民センター第31回ふれあいまつり」に今年で24回目の参加を果たす事が出来ました。

今年は先ず3曲「百万本のバラ」「ステンカラージン」「ウクライナ民謡＝月夜をウクライナ語」を二部合唱で歌い、最後に「ロシアの野原」を混声四部合唱で歌い上げ、観客の方々から暖かい拍手を頂きました。ふれあいまつりは昨年30周年を迎え今年は次の10年に向けての第1歩となるイベントでしたが、演技部門の参加23団体の中でも我が会は2番目に古い参加団体となりました。

今年は男声新会員も加わり、春から厳しくかつ活気ある練習を重ねて参りました。他の参加合唱団は殆どが数名の男声のみの合唱団ですが、我が会は男声陣が10名を超える唯一の合唱団として羨ましがられるほどになりました。

これからもロシア語でロシアの民謡、歌曲、ロマンスを歌う会として継続して参ります。来期の課題曲には11月10日（土）より取り組みます。今後とも日ロ交流協会の更なるご支援をお願いする次第です。（ロシア民謡を楽しむ会・代表）

訃報

西澤潤一名誉会長が、10月21日に92歳でご逝去されました。東北大学名誉教授で、首都大学東京の元学長等を歴任された西澤先生は、ミスター半導体、光通信の父といわれ、電子工学の分野で数々の発明をされたことは周知のごとくです。89年には文化勲章、2002年には世界最大の米国電気電子学会が初めて日本人の名を冠した「ジュンイチ・ニシザワ・メダル」を創設しました。

協会では、1999年から2001年まで会長に就任され、その後名誉会長となられました。常に中立公正の立場で総会でも発言され、非営利活動法人として協会が認定されるようになった立役者でもあります。広い視野に立って遠い未来を見据え、はるか先の世界の創造図を力強く語る姿はいつも若々しく眩しく見えました。数々の逸話の持ち主で、独創的な稀有な科学者であり、誠に世界の財産といえる方でした。このような科学者が日本で生まれ活躍したということは、実に誇るべきことです。

心からのご冥福をお祈りいたします。

合掌　　（広報部）

日ロ交流バーベキューパーティーに参加して

マリヤ・ミハリョーワ

秋涼の風が野山を吹き渡ってゆく九月二十九日に日ロ交流協会主催のバーベキュー会に参加しました。ロシア人である私は、高校の時から日本文化に熱中し、〝日本〟とはどんな国なのかという謎を解きたい気持ちで、ロシアのトップ大学であるモスクワ大学そして日本の創価大学に入学し、日本語を初め、日本史、日本文化、日本政治を勉強してまいりました。しかし、在学中に、日本人のロシアに対する印象が偏っていることに気づき、更に日本とロシアの友好を進めたいという夢を持ちました。日本の方にロシアについて理解する機会を少しでも広めたいと思い、たまたま日ロ交流協会の活動に参加するようになりました。今回も喜んで、九月にいただいたご招待に応じました。このバーベキュー会に参加するのは二回目になりました。

集合場所である高尾駅に着くと、にわか雨が降り出し、涼しくなりましたが、話し相手になってくださった参加者の方々と心温かく交流し、「あっという間の待ち時間だったなぁ」と感じました。バーベキュー場に向かうバスの窓から霧に包まれた山の景色を眺めながら、周りの人の話に耳を傾けてみると、ロシア語で話す日本人の方と日本語で話すロシア人の方が本について会話をし、ここはまるで国境が存在しないような少し不思議な気分になりました。

バーベキュー会場では、ロシアに興味のある日本人の学生さんをはじめ、お子様連れのご家族やビジネスマン、駐日ロ

シア連邦通商代表部の代表者などのさまざまな人が集まり、一緒に高級なお肉や野菜を味わいながら、世界状況や日ロ関係、歴史や文化、旅行や料理などについてお話をし、知識や価値を共有する機会をたくさん得ることで自分の視野を広げることができました。また、ロシアに興味を持つ日本人が少なくないということは、ロシア人である私にとってとてもうれしい驚きでした。さらに、日本人とロシア人には共通するところが意外と多いことを強く感じました。

終了後には、連絡先を交換したり、記念写真を撮ったり、ロシア語を教えたりして、とても楽しい一日を過ごしました。

こうして、このような交流の場は、人と人、国と国がより良く結びつく一助として非常に大切であると考え、今後も続いていくことを期待しております。

(創価大学院卒・日系企業内定)

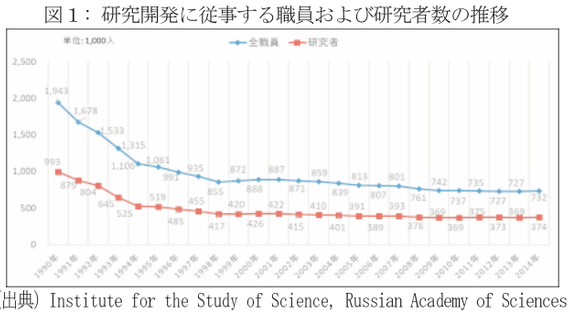
＜ロシアの現状を知る＞

優秀な研究人材をどう確保し呼び込むか

津田　憂子

先日、2018年のノーベル賞受賞者の発表があり、京都大学の本庶佑特別教授が生理学・医学賞に決まったことは記憶に新しいと思います。ノーベル賞は人類の英知の進歩に貢献するような素晴らしい研究成果に対して与えられるものですが、こうした研究を支える優秀な研究者をどのように確保しどのように呼び込むかという点は、各国・各地域にとって切実な問題となっています。今回は、ロシアの現状についてお話したいと思います。

図１：研究開発に従事する職員および研究者数の推移



(出典) Institute for the Study of Science, Russian Academy of Sciences

ロシアの研究者はソ連時代と比べて約３分の１にまで減少したという指摘があり、図１のデータはその点を示しています。ソ連崩壊とともに、研究者の財政事情が急激に悪化し、困窮化した研究者の一部はより良い待遇を求めて好条件で研究ができる海外に出てしまったこと、より待遇の良い職業を求めて金融業や不動産業など新規のサービス業に転職する研究者が現れたこと、また、研究職が若者の将来の就職先として魅力あるものでなくなったこと等の要因が絡み合い、ロシアの研究者数は大幅に減りました。

優れた研究成果を残すには優れた研究者が必要です。政府が多額の資金を投じたとしてもそれを使う優秀な人間がいなければ大きな効果が期待できません。現代の科学は世界規模で展開し、科学者の国籍を語ることに意味がなくなる中、ロシアも海外の研究者が自由に活躍できる場にしていかないと世界的な潮流に乗り遅れてしまいます。

しかし実際には、ソ連・ロシアで教育を受け2010年にノーベル物理学賞を受賞したアンドレ・ガイム博士とコンスタンチン・ノボセロフ博士が次のようにインタビューで述べたことは、ロシアの現状を言い当てているのかもしれません。

「ロシアには研究施設も環境も整っておらず、汚職や官僚主義が蔓延る中、国際的なチームを率いて高い水準の研究が実施できるとは思えない。自分たちが受けた教育は世界最高水準のものだったが、研究者としてロシアに戻るつもりはない。」

科学者に国籍はあっても科学に国境はありません。これからのロシア科学はこの現実をどう乗り越えていくのでしょうか。　(JST研究開発戦略センター・フェロー)

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先：郵便口座00160-9-66486、加入者：日ロ交流協会

連絡先：日ロ交流協会事務局E-Mail：nichiro@nichiro.org

＊番場憲雅氏、滝波秀子氏からご寄付頂きました。ご協力ありがとうございます。

《モスクワ・アラカルト50》

お金で買えないプロプカの話

日向寺 康雄

ロシア語で本来「コルク」を意味する「ПРОБКА(プロプカ)」を、今のモスクワっ子達はまず「交通渋滞」を指す言葉として使う。しかし私がモスクワで働き始めた30年前は、そうではなかった。それはまず「風呂の栓」を意味するものだった。

ゴルバチョフ書記長が推し進めるペレストロイカの時代、国民の需要に合わせ科学的に計算され、計画的に生産されているはずの商品はなぜか多くが店に出回らず、物不足は常態化、深刻化していた。私がモスクワ生活を始めて、最初に肌で覚えた日常語の一つは「ДЕФИЦИТ(物不足)」である。資本主義国の常識では信じられない何でもない日常品が、なぜか不足するのだ。バブルが弾ける前の華やかなりし大量消費(あるいは浪費)時代の只中にいた私は、ほとんど空っぽの店の棚に唖然とし「果たしてここで生き抜けるか？」強い危機感を持った事を鮮明に覚えている。たまに物が出回ると長蛇の列ができ、長時間行列に並ぶことになる。パンや乳製品、ジャガイモなど生活必需品は確かに安く品質も悪くなかったが、単一銘柄ばかりで選択の余地がなく、買い物は、生きるために不可欠なものをとにかく手に入れる骨の折れる作業で、楽しむ余裕などなかった。

プロプカをめぐる状況も例外ではなく、放送局が用意してくれたアパートには、頑丈で巨大な浴槽があったが、いっぱいにお湯をため、そこに浸かってリフレッシュしたいという願いは、容易には叶わなかった。近くの雑貨店を回ったがどこにもなく、同僚の勧めでレーニン大通りにそびえ立つガガーリン記念像のすぐ足元にあった、当局の説明では「日用雑貨なら何でもそろう店ТЫСЯЧИМЕЛОЧЕЙ（幾千の小物)」にも行ってみたが、無駄足だった。あのまま私が、排水口にかかとを注意深くのせながら、浴槽に身を横たえる日々を余儀なくされていたら、おそらく1年持たずに帰国していたに違いない。しかしソ連社会の矛盾に身をもって直面し失望のどん底に落ちた時、新しい不思議な世界の扉が開いた。何かと私のことを心配してくれていたN通信のP記者が、ユーモアたっぷりに「ブルジョアの遊びで使われたものを、ソ連人民は賢く再利用する」と言って、使い古しのゴルフボールをプレゼントしてくれたのだ。なるほどボールは排水口にぴったりはまり、見事に栓の代わりとなった。本物の栓も、同僚の女友達が、自分の職場の友達の友達を通じ手品のように、どこからか手に入れてくれた。

ソ連社会では、ユーモアを忘れず優しく互いに助け合い、友達の輪が広がれば広がるほど、生活が楽しく、それなりに豊かになることを知った。あのプロプカは、お金では買えないものがある事、良い友人さえいれば人はこの世をどうにか渡って行ける事を教えてくれた。私は、一生の宝物として今もこの栓を大切にしている。ちなみに、これを調達してくれた素敵なロシア女性の名は、リューバ(Любовь=愛)と言った。

2018年9月ウラジオストック

倉田 有佳

9月初旬、東方経済フォーラムの枠内で「ロシア歴史協会」(ナルィシキン代表）が主催する国際会議「領事館開設160年記念　歴史と現在から見た日ロ関係」に在日ロシア大使館からの招待を受けて出席した。5年ぶりのウラジオストクだ。出発直前、「北海道胆振東部地震」が起こり、二日間、自宅マンションは停電・断水した。地震被害の全容を知ったのは、出発前夜に泊まった東京のホテルで見たテレビニュースからだ。

想えば、1990年代のウラジオストクは、停電と断水が日常化していた。筆者が着任した頃には、井戸と自家発電機を備えた外国人用の高級住宅ができていたが、前任者は、「暗闇は人を凶暴にする」という名言を残し帰国した。

さて、会議翌日、旧友（写真右）と再会し、駅近くのグルジア料理店に入った。地震の被害を心配してくれたため、停電と断水で大変だったが、かつてのウラジオストクに比べれば・・・、と話し始めると、「あの頃のことは思い出したくない」、と顔を曇らせた。「平穏な暮らしの中で文化・芸術に親しめる今の世の中が続いてほしい」、と。

筆者は同じ場所、同じ時間を過ごしていた。だが彼らの苦労をどこまで理解していただろうか。土日になれば、少しの暇を見つけては三人（もう一人のS氏とは、今回は会議会場で再会）で街を歩き、彼らの仕事場だった屋根裏の小部屋で時間を忘れておしゃべりした。知的刺激を受け、パワーをもらっていたのは筆者の方だ。

現在のウラジオストクは、ロシア極東経済の中心地だ。マリインスキー劇場、エルミタージュ美術館、トレチャコフ美術館の分館や支部ができたことで市民の文化生活も各段に向上した。だが、ウラジオストクを愛する一人としては、この街が「ヨーロッパ・ロシアの殖民地」になってしまうようで不安だ。

そんな思いを抱えながら、友人が副館長を務める「沿海地方国立美術館」を案内された。聞くところによれば、所蔵する絵画のほとんどが、1930年代にロシア美術館やエルミタージュ美術館などから送られてきたものだ。「ウラジオストクにも金持ちはいたが、三代続く富裕者でなければ、一流絵画のコレクターにはなれない。ウラジオストクにはそれだけの時間がなかった」、と友人は語る。

改めて街の歴史を振り返れば、軍事哨所、ウクライナ移民、20世紀初頭の国際都市「浦潮」。ソ連崩壊後の混乱期の経済は、周辺諸国（日・中・韓）に大きく依存していた。

よそから「力」を得て、それを梃子に独自の歴史・文化を発展させてきたのがウラジオストクではないか。今はまず、現在の暮らしに心から満足している友人に共感し、街の行方は静かに見守ることにしよう。

(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)